

書評

レッシングのヴォルフヘン
ビュッテル時代Heinrich Schneider, Lessing. Zwölf
biographische Studien. Bern 1951. 312S.

良 知 力

I H・シュナイダーの研究

Heinrich Schneider, Lessing. Zwölf biographische Studien. Bern 1951. 312 S. この傳記研究は、多くの全く新しい資料や見解を提示している點で、ヴォルフヘンビュッテル時代のレッシング研究に大きな前進をもたらした書物と言えよう。

ゴットホルト・エフライム・レッシング Gotthold Ephraim Lessing (一七二九—八二) についての研究やまた彼自身の著作の刊行はブルジョア出版界の寵兒である、とフランツ・メーリングはかつて述べたが、その事情は今でも變つていない。一八八〇年代までの・ブリティッシュ・ニューズピアムの藏書目録を

一見してをえ、レッシング研究はその細部にわたつて、しかも多方面から、なされつくされているかの感さえ興えられ、他方著作集の出版も、大衆版まで考慮に入れるならば、おびただしい數にのぼるであろう。しかし、最近まで傳記の研究については、ヘーリッポ・シットマンの研究 (Erich Schmidt, Lessing. Geschichte seines Lebens und seiner Schriften. Berlin 1884. 3. Aufl. 1909. 2 Bde.) が、その實證性にならば、ほぼ決定的なものとみなされてきたし、著作集については、ラーマン及ビマンカーの版 (Lessings Sämtliche Schriften. Hrsg. v. Karl Lachmann. 3. Aufl. v. Franz Muncker. Stuttgart u. Leipzig 1886—1924. 23 Bde.) や、ケーマン及ホルステンヤーンの版 (Lessings Werke. Vollst. Ausg. in 25 Teilen. Hrsg. v. Julius Petersen u. Waldemar v. Olshausen etc. Berlin-Leipzig 1925—1935.) とが、そのそれそれの缺陷を帯びながら、學術的標準版と考えられてきたのである。更に彼の對話集としては、ド・ノッホ・ゾーデルマンの手になるものが擧げらるべきであらう。(G. E. Lessings Gespräche nebst sonstigen Zeugnissen aus seinem Umgang. Zum erstmalig gesammelt u. herausgegeben von Flooard Freiherrn von Biedermann. Berlin 1924.) —— 資まで不精な私は、まだこれらの版のいずれにもおめにかかつていない。

しかし、それ以後の實證的研究の進捗と共に、シュミットの

見解が修正補足されるべき・いくつかの事實や、あるいは未發表の・従つて上述の版にも缺けているところの書簡や對話が新しく發見されたのである。シュナイダーがその實證研究を發表した最初の意圖はこの點にかかつている。

シュナイダーはこの論文集の史料を、ドイツを中心としたヨーロッパのみならず、戦時中の政治的追放期間における・彼の生活の場であつたアメリカにまで求め、更にその文獻操作においても、レッシング自身についての文獻だけではなく、廣く同時代人の著作、書簡及び彼等についての研究にまでも目をとおし、そこから従來の研究で見落されていた事實をひき出してゐる。しかもこの研究は、獨創的な見解を多くふくんでゐるとはいへ、レッシング(とりわけヴォルフエンビュッテル時代)の傳記的諸事實についての實證的研究という枠から一步も踏み出してはいない。著者はこの態度を、最近における實證主義輕視の風潮に對立せしめてゐる。實際、戦後いくつかのパンフレットと共に出版された・オッター・マンのレッシング研究(Otto Mann, Lessing: Sein und Leistung, Hamburg 1949)にしても、傳記については簡略にしか扱かつてゐないし、イギリスで出たレッシング研究(H. B. Garland, Lessing: The Founder of Modern German Literature, London 1937, 2. impression, 1949)もその點同様であるのみか、レッシングの生れた日付をあやまつて印刷してゐるほどである。

かつてメーリングは、いわゆるブルジョア文學史家(誰より

書 評

もシュミットがそこにふくまれていた)によつて作りあげられた・フリードリッヒ二世やレッシングについてのレーゲンデを破壊することを、自己の課題としたのであるが、その際、F・ラッサールのパンフレット(Ferdinand Lassalle, Gotthold Ephraim Lessing vom kulturhistorischen Standpunkt, 3. Aufl. Leipzig 1880.)や、えも批判の對象としなければならなかつた。(Franz Mehring, Die Lessing-Legende, 2. Aufl. Stuttgart 1906, S. 65 ff.)そのことはレッシング解釋の困難性を示す良き例である。そこでの直接の問題は、フリードリッヒ二世の啓蒙性をいかに解釋するかということにあつたのかも知れないが、だが同時にそのことは、『軍事的かつ封建的世襲階級國家』との關連においてレッシングの生涯をどのように解釋するか、という困難な問題に我々をひきこむからである。更に、十八世紀ドイツにおける・きわめて多岐な思想の流れは、體系を忌避したレッシング自身の性格とあひまつて、彼の思想をそのままに於いて理解することを困難ならしめてゐる。晩年のレッシングが、當時『死んだ犬について語る如く』人々によつて語られていたスピノーザの影響を果して決定的に受けていたであらうか、という問題はその一例である。彼の友人の中で、『レッシングはその晩年において決定的なスピノーザ主義者だつた』と主張したF・H・ヤーコービ(ヘリーゼ・ライマンヌあひ、一七八三・七・二十一 vgl. F. H. Jacobi, Ueber die Lehre des Spinoza, in Briefen an M. Mendelssohn, Werke

Bd. 4. Abt. I. S. 40.)に對して、モーゼス・メンデルスゾーンは繰り返してつゞきの疑惑を表明した。(M. Mendelssohn, Morgenstunden. XV. An die Freunde Lessings.) ところがこの問題は現在にいたるも決定的な線に達してはいない。

しかし、これら解釋上の問題はシュナイダーの書物の關心の外にある。あらゆる研究を良心的に「dokumentieren」しようとした著者は、すべての文學研究の基盤あるいは前提としての事實研究に重點をおいているからである。従つて彼の努力は、たとえば『人類の教育』の眞實の著者についての疑問を實證的に解決しようとする努力などにはあらわれていない。(第九論文)それは實に百年來の疑問であり、第一次大戦前後にも烈しい論争が行なわれたものだからである。しかしまた、このように實證性に徹した事實研究においても、著者の立場はおのずからあらわれてはいる。たとえば、アメリカ獨立戦争に際して州兵をイギリスに賣却したブラウンシュヴァイク公に對する著者の批判的抜かい(第八論文)は、少くともそこにあらわれた限りにおいて、メーリングの態度と同じ色彩の絲によつて結ばれている。

ここに集められたモノグラフィは、一九二〇年代から最近までの約二十五年間にアメリカ及びドイツの諸雑誌に發表されたものに加筆修正をほどこしたものである。従つて、それはレッシングの傳記を包括的に扱かつたものではなく、とりわけ神學論争はほとんど對象とされていない。とはいへ、豊富な源泉

史料と卓越した洞察眼に裏づけられた書物である。しかも社會的良心に貫かれたドイツ學者の一生がかげられた實證研究であつてみれば、私たち學生が口をはさむべき何ものも存しないのは當然である。以下の・私の小文は、もはや書評というものはなく、シュナイダーの研究對象であるレッシングのヴォルフエンビュッテル時代の側面的性格の二、三を、私なりに述べておいていただいたものにすぎない。

二 彼のヴォルフエンビュッテル時代の概略

レッシングのヴォルフエンビュッテル時代は一七七〇年五月に始まる。彼は四十一才の獨身であつた。ヴォルフエンビュッテル圖書館長としてブラウンシュヴァイク公の下に勤務した彼は、十萬冊以上のぼる書物や手稿の整理、さまざまな學者との寫本の交換、本屋及び學者との複本目錄の交換、重要な書物の購入、外國學者の質問や借用希望に對する應諾など、ビブリオテカールとしての仕事を忠實に行なうと共に、(シュナイダー第四論文参照)委ねられた多くの貴重書を最初の發見者たるべき期待に燃えて探究した結果、多くの埋もれた史料を發見し、檢閲免除の特權の下に公爵出版局をとおして出版するのである。とりわけ、一七七三年より、『Zur Geschichte und Literatur aus den Schätzen der Herzoglichen Bibliothek zu Wolfenbüttel Beiträge』なる表題の下にきわめて多方面な資料が刊行され、その中に神學論争の口火となつた『一無名氏の斷片』

(一七七四—七八年刊)が存在する。これらの断片は、彼がハンブルグ時代に知り合ひ・當時既に死去していたH・S・ライマールス(一七六八年歿)の終生にわたる著作『神の理性的崇拜者のための辯明あるいは辯護文』(Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes)の一部であつた。當然にレッシングは、この極端に前進した合理主義者のキリスト教批判を世人に示すにあつて、それとはことなつた・彼自身の宗教観をも併せ示したのであるが、正統ルター派の偏狭な諸觀念の容れるところとならず、ハンブルグ牧師長ゲッツェ(Johann Melchior Goetze)を先頭とする一派によつてキリスト教の敵とみなされ、一連の神學論争を展開することを余儀なくされる。やがて、ハレの歴史的神學者ゼムラー(J. S. Semler)等の啓蒙神學者をふくめた・全プロテスタント・ドイツの宗教的及び教會的諸權力が孤立したレッシングに對して加えた壓力は、世俗的な專政勢力の力までも借りるにいたつた。断片の没收命令や檢閲免除の特權の剝奪がそれである。デスポットの命令によつて論争の繼續を禁止された彼は、殘された唯一の手段として、せめて人々が『私の昔の説教臺つまり舞臺の上で、さまたげることなく私に説教させてくれるかどうか、ためして』みようとする。(断片著者ライマールスの娘エリッゼあて、一七七八・九・六。以下、書簡の引用は G. E. Lessings Briefe und Schriften. Hrsg. v. Carl Enders. Berlin 1915. Nr. 14) として世にのこされたものが『賢者ナータン』における宗教的

寛容の理念であつた。だが、それは、かの『人類的教育』における・人間の無限の進歩への確信と共に、愛する『エヴァの死んだ部屋』から生れる。ドイツの社會は自己の眞理を表明する手段を彼から奪つた。しかもそれは妻と子を失つた悲しみの中で、であつた。かつて彼は古代人にならつて死を美と斷じた。今、愛する妻の死の中に、彼の言う『眠りの双生児』を見出し得たであろうか。否である。『……きのうの朝、妻の遺骸は私の見えないところに行つてしまいました。……もしも私が、私の殘つた日々の半分を以つて、他の半分を妻と共にすごすという幸福を買い求めることができるならば、どんなにか喜んでそれを行つたことでしょうか。しかし、それはできない相談です。今はただ、自分の途をひとり、ぼんやりと進み始めねばならないのです。』(エッセンブルグあて、一七七八・一・十四) 彼がエヴァと共に暮し得たのはわずか十五ヶ月である。だが彼女への愛こそ、晩年の彼の運命を導いた一筋の糸であつたと言えよう。はなやかな文藝批評家をしてヴォルフエンビュッテルの寂寞の中に導びき、自立的な市民階級の詩人をして、『人間屠殺人』とも言うべきデスポットの前に少くとも物質的には屈せしめたのも、四人の子をかかえた未亡人エヴァ・ケーニヒと少しも早く結ばれようとする願ひのいたせるわざであつたらうから。ライプツィヒにおける若き日の・うたかたの戀(F. W. Rolleston, Life of Lessing, 1889, P. 40)や、言語學者J・ライスケ(一七七四年没)の若き妻が彼にいだいた・望み

なき戀（シュナイダー第六論文参照）も語られてはいるが、愛の往復書簡によつて育てられた・この愛こそ、詩人の生涯においてただひとつ實を結んだ赤い花であつた。その婚約時代には、エヴァの・遺産整理のためのウイン滞在（シュナイダー第十論文）や、レッシングの意にそまぬイタリー旅行などが存在する。それは、結ばるべくして結ばれぬ愛への焦燥と、また絶望の期間でもあつた。しかし、何よりも二人の結びつきをさまたげたものは、ブラウンシュヴァイク公の經濟的虐待であつた。詩人が生活するためには、屈従と妥協のみが必要とされた時代である。靴屋のせがれヴィンケルマンは、改宗を代償にして飢餓と名聲を取りかえしたし、フランス革命の詩人クロップストックさえも、外國貴族の保護なしでは生きられなかつた時代である。市民階級の詩人レッシングが、遂に宮廷に從屬しながらも、なお最低限に彼自身であり得るためには、愛する者との結びつきがさまたげられる程の貧苦に耐えねばならなかつたわけである。

三 レッシングとドイツ小宮廷

このように神學論争とエヴァとの愛によつていろいろられた彼のヴォルフエニヴェツテル時代を理解するためには、ひとまず彼のハンブルグ時代に我々の視点をさかのぼらせねばならない。そして、一七六七年から翌年にかけての・ハンブルグ商人による國民劇場運営の企てが、更に批評家及び顧問としてそれに參

加したレッシングの市民演劇創造の願いが、わずか一年半で壊滅してしまつた事實こそ、彼を市民の手からデスポットの手に押しやつた直接の誘因であることを知らねばならない。

一般にハンブルグが、その地理的好條件の故に、十六世紀以來のドイツ諸都市の凋落という一般現象の例外であり得たといふことは、ドイツ史における基本現象のひとつとして述べられるべきである。（vgl. Karl Lamprecht, Deutsche Geschichte, Bd. VII. 1. S. 8.）しかし他面では、七年戦争が終結した一七六三年即ちハンブルグ劇場開設の四年前には、主としてイギリスの手形支拂いに起因する・貨幣流通の混乱がひき起され、六十の商店が支拂いを停止したという事實も報告されている。（vgl. Johann Georg Büsch, Versuch einer Geschichte der Hamburgischen Handlung, Hamburg 1797, S. 114 ff. Max von Boehn, Deutschland im 18. Jahrhundert, S. 129.）自分たちの詩人を自分たちの手にとどめておき得なかつた市民意識の低さは、實は都市經濟の推移と離れ得ないものであつた。これはその例證のひとつであらうか。レッシングの『ハンブルグ演劇論』は、ドイツ市民の文化意識の低さについての慨嘆の書でもある。——『この點で、〔詩人の價值や、劇場が道徳や慣習に及ぼす影響を認める點で〕我々ドイツ人はどれだけフランス人におかれていることであらうか。あからさまに言うならば、彼等と比較した我々はいまだ真正正銘の野蠻人である。』（IV・四二二、以下著作の引用は、ウイトコフスキー編七卷本による。ロ

ーマ数字は巻数、日本数字はページ数を示す。）

このように、ドイツ諸都市の中では比較的高度な文化水準を保つていたハンブルグさえも、レッシング等の市民的願望を實現し得る場ではあり得なかつた。十七世紀中葉以來、ドイツ文化のヘゲモニーが市民から貴族に移行した結果であらう。當時のドイツ宮廷もまた、『社交人』の理念として流入したフランス文化の影響の下、カステラの精神の復活という形をおして、中央集権へのゆがめられた過程をたどつていたのである。そして、しばしば述べられるように、儀式ばつた生活、肩書欲、礮官運動、マールカンテリスムスを理論的支柱とした極度な浪費などの道德的腐敗が宮廷を支配していた。

當時、ウィーンに對する忠誠によつて、その生涯を特色づけながら、しかもなおドイツ・デスポチスムスに對しては嚴正な審斷を下した者に、モーゼル父子がある。F・C・フォン・モーゼルは、その『主君としも、』(Friedrich Carl von Moser, Der Herr und der Diener geschicht mit patriotscher Freyheit, Frankfurt 1759)において、宮廷運営の指導原理を求めながら、多くの實例をおして、『だが、租國を愛する涙と共に私は言おう。ドイツの自由というこの上なく貴重な贈物をあやまることなく使用している君主は、どんなにか少いことであらう。もはや、良いものと悪いものとの間ではなく、悪いものともつと悪いものとの間を選択することのみが許されるような

時代が、どんなにか我々の間近に近づいていくことであらう。我々の現在の諸政府の大多數のもののが外観に慰めとなるようなものが見られるだろうか。我々の今後の世襲君主の多くが、何よりも人民に向つてどのようなものになるだろうかと考えると、私はドイツ人であることが恥づかしくなるほどである。』(二三ページ以下)

ごく少數の例外をのぞいて、一般に政治的發言がことさらに控えられたといふことこそ、十八世紀ドイツ啓蒙思想の特色のひとつであつた。ヴェルテンベルクにおいては、絶對君主に批判を加えた者がたどるべき途は、ホーエン・アスベルクの牢獄に通じていた。十八世紀ドイツの一つの象徴である。ヴェルテンベルク公カール・オイゲンによつて作り出された・いくつかの受難史のうち、一七五九年から六三年にわたるJ・J・モーゼルの不當な投獄と共に、一七七七年以來十年にわたつた・政治詩人C・F・D・シューバルトの獄中生活は、十八世紀ドイツ文學における・異彩ある記録を生み出したのである。とりわけシューバルトは、裁判も判決も受けずに最初の一年を地下牢に送り、執筆の手段は四年間うばわれ、ようやく妻と會えたのも八年後のことであつた。ただ、神への純粹な愛と聖なる死への希望のみに頼りながらも、なお獄中から詩集を刊行した彼は、『まだ生きてはいるが、みじめに希望なく生きていくことを知らせるため』の・妻への手紙(一七八五年六月八日)の中で書いていふ——『實際、ドイツのどのような州でも、ヴェルテン

ベルク以上に思想上の奴隷状態が支配しているところはあるまい。だから、すぐれた人々は、外國へ行くか、さもなければ沈黙を守つてゐるのだ』と。(vgl. D. F. Straub, Christian Friedrich Daniel Schubarts Leben in seinen Briefen. 2. Bd. S. 130.)

だが、『どのような法律もかえりみられず、支配者の好みと氣分とが最高の法律であり、ホーエン・アスベルクの獄が究極的論據でもつた』(D. F. Straub, König Wilhelm von Württemberg. Gesammelte Schriften. 1. Bd. S. 220.)と云ふ、當時のヴェルテンベルクの形容は、おそらくドイツ小國の一般現象であつたらう。

カール一世の下で、全盛を誇つていたブラウンシュヴァイク宮廷は、レッシングの名をおして、その例外であろうと欲したのであるうか。だが、彼及びその後継者K・W・フェルディナントもまた、『その四分の三までは健全な良識を持たない』ドイツ諸侯の一人であることには變りなかつたと言えよう。彼もまた、アメリカ獨立戦争に際して、多くの州の子弟をイギリスに賣却した専政君主たちの代表的人物であつた。その非人間的行爲は、幾人かの後世史家のきびしい批判(メーリング前掲書第九章、M・フォン・ベーン前掲書二二六ページ以下、H・シユナイダー第八論文)や多くの進歩的同時代人による非難(シラー『たくみと戀』二幕二場、F・C・フォン・モーゼル前掲書五十八ページ、その他詩人のJ・G・ゾイメ、J・C・ツェ

ンカー、更にシユレーヴァルト、C・M・ヴェーラント、A・L・フォン・シユレーツァーなど)の前に立たされたのみならず、外國の良識ある人々の眉をもしかめさせたのである。——『人民の血を賣つた・これらのドイツ貴族の行爲は、全ヨーロッパの輕侮と憎惡とを招いたのです。』(マンジンジャミン・フランクリンの書簡、ジョン・ウイントロップあて、一七七七年五月一日)

ヴォルフエンビュッテルにおけるレッシングの孤獨と貧困(シユナイダー第三論文参照)は、これらの人間賣却事件の渦中において生じたものであつた。彼自身は、それについて何等發言してゐない。しかし、一時は絶望にまで達した・彼の經濟的逆遇が、公子フェルディナントのしばしばの違約にもとづくものであり、更に前述の事件が、浪費に因を持つブラウンシュヴァイク宮廷の財政難を救うためのものであつたことを考え合わせるとき、宮廷の非行と詩人の窮乏とは、一つの本質の裏と表であつたことが知られるのである。つまり、悲劇『エミリア・ガロツティ』にも示されているような・貴族の人間の及ぶ道德的腐敗は、個々の人間の問題というよりも、むしろ個有的經濟的及び社會的基盤の上での階級的附隨現象に外ならなかつたのではないだらうか。たとえば、次男以下の貴族にとつては、ただ官吏と軍人のみがたどり得る途であつた。領主にもなれず、そうかと言つて市民的職業につくことも禁止されていたからである。その場合、ドイツの・封鎖されたカステの諸國家におけ

る軍國主義的風潮が、これら貴族の志操の上にとどのような悪影響を與えたであらうか。メーリングのプロイセン批判をまつまでもなく、既に前述のF・C・フォン・モーゼルによつて鋭く指摘されたところである。ドイツ文學においては、外來的な宮廷趣味の民族的克服が、往々戰場詩をおしての愛國的志操の高揚という形で要求された。(vgl. Justus Moser, Ueber die Deutsche Sprache und Literatur. Vermischte Schriften. I. Tl. S. 190. この小文は、フリードリッヒ二世のドイツ文學論に對する直接の反駁である)だが、それも、多くの詩人の生活が、このような軍國主義的宮廷に從屬していた結果に外ならない、と我々が考えることはあやまりであらうか。

先にも觸れたように、レッシングはその生涯をおして、二、三の抽象的發言を除けば、直接の政治批評はほとんど行つていない。にもかかわらず、晩年の神學論争は社會的彈壓を結末とした。そこには、ルター派教會史の社會的側面とのつながりがある。つまり、『ドイツ教會』は存在せず、エピソードは廢され、宗教及び教會の制度は、いわゆる「Summaepiskopale」によつて代表されていたという側面である。プロイセンのアルゲマイネス・ラントレヒトにも示されたように、教會は、いわば國家の一部門にすぎなかつた。従つて、十八世紀後半のドイツにおいても、宗教思想における異端は、政治批判の線にもつながる一面をも持つていたのではなからうか。單なる宗教思想の故にレッシングに加えられた迫害の手は、宗教的及び教

會的諸權力のみならず、世俗的かつ政治的權力をもその背景としていた——それも、ドイツ宗教政治の一表現であらうから。

四 レッシングの神學論争の性格

では、神學論争にあらわれた・レッシングの宗教思想は、どのような性格のものであつたらう。何よりも、それは、心情をおして信仰をより内面化しようとする經驗的努力において、ピエティスムスの精神潮流との内的結びつきを示している。

一般に十七世紀以來、自然宗教の哲學概念の發展と共に、プロテスタント・ドイツにおける・正統派と合理主義との鬭争の場が推移する。問題が、ドグマへの固執と聖書のより自由な理性的解釋との對立から、理性と啓示との、思想と信仰との對立に轉じたことは周知のところである。いわば、辯神論をおして、哲學と神學との啓蒙的和解が問題となつてきたのである。

この啓蒙神學は、ヴォルフの後繼者のひとりゼムラー等を経て、國富論の最初の獨譯者C・ガルフェヤ、問題のライマルスにおいて、もつとも尖鋭な——と言つても政治的な意味で、ではないが——段階に到達する。だが、レッシングにとつては、哲學と神學との間の「隔壁を取り拂つてしまひ、理性的キリスト教徒にするという口實の下に、我々を全く非理性的な哲學者にして」(弟カールあて、一七七四・二・二)しまふ・これら合理主義的傾向こそ、當の批判對象であつたわけである。従つて、彼にとつては、信仰上の問題を哲學的に批判した啓蒙神學——

それが哲學的にはどんなに正しいとしても——も、宗教の眞理の基礎をひたすらに聖書の文字の上においた正統派も、宗教の『内的眞理』と、その内的眞理についての歴史的知識即ち『聖書解釋上の眞理』(hermeneutische Wahrheit)とを、言いかえるなら、『必然的な理性的眞理』と『偶然的な歴史的眞理』とを混同したものと考えられたのである。(Ⅶ・二一五及び八二)彼はこう述べている、『文字は精神ではなく、聖書は宗教ではない。』従つて、『文字や聖書に對する非難は、精神や宗教に對する非難と同じものではない。』『聖書が存在する前にも宗教は存在した』のであり、『宗教は、福音作家や使徒が教えたから眞實であるのではなく、それが眞實であるから、彼等がそれを教えたのだ。』(Ⅶ・五四以下)

彼は、若き日においては、既存宗教の因習性を批判し、後年もまた、終始とらわれることのない・自立的な『異端』の眼を以つて、世を眺めた。その限り、彼もまた、理性をとおして全てを新しく作り出そうとした・啓蒙哲學の方法的特質を享受したと言えよう。しかもなお、後年の彼の中にすぐれて見出されるものは、非合理という意味において啓蒙的合理主義と對立するところの主觀主義的傾向である。『理性が宗教に對してきわめて活發に行なつてゐる・すべての非難をとりのぞくことは、たとえできないとしても、宗教の本質的眞理についての内的感情をひとたび獲得したキリスト教徒の心の中では、宗教はゆるぎもしなければ、やつれもせず存在し續けるのだ』という・

彼の言葉は、そのことを示すものである。(Ⅶ・一八五)彼にとつて、眞のキリスト教徒とは、宗教の眞理を頭で考へる神學者ではなく、心で感じる民衆に外ならなかつたわけである。

この點における・ビエティスムスの親近性は、既に、若き日の『ヘルンフター論』(一七五〇年)の中でも示されている。だが、そのような親近性は、單に、化石となつたスコラ的ルター主義への反發としての・あるいはマイスター・エックハルトの神祕的傳統への回歸としての『心情をとおしての信仰』という面にとどまるものではなからう。他面それは、啓蒙(ドイツ語の使用)、博愛(貧民救濟)そして世界主義(世界の邊地傳道)という・A・H・フランケやN・フォン・ツィンツェンドルフの教育理念に、あるいは、信仰の個人的内面化をとおして階級分化に稱渡しをしようとした・彼等の社會的一側面にも、深いかわりを持つことである。

だが、レッスンゲにとつて、このような理念とのつながりが一層明らかにならわれるのは、彼のフライマウレイとの關係においてである。彼自身、一七七一年には(七五年説もある)フライマウラーの一結社に加入し、『エルンストとファルク』(前半一七七八年、後半一七八〇年刊)という表題の下に、フライマウレイに關する對話を發表している。(この經過については、シュナイダーの第七論文参照)アドルフ・シュタールは、その對話の中に無政府主義への欲求を見出し、(メーリング前掲書四〇七ページ以下に反批判がある)更に、最近のレッ

シング研究も、そこに存するものは社會主義の否定である、と指摘している。(H・B・ガーラント前掲書一九五ページ)しかし、それは一八七〇年代のドイツ社會の産物であつた。その限り、それも、偶然的な歴史的眞理と必然的な理性的眞理というアンチ・テーゼの中に表現を見出すところの・新しい啓蒙的歴史觀を——他面ではキリスト教に適用したように——フライマウレライにも適用しようとした企てであり、更に、フライマウレライの中に、國家、人種、身分、風俗、倫理、宗教、その他あらゆる市民的制限を超越したフマニテートの理念を抽象的に想定することによつて、人間と人間とを分離せしめる市民的諸關係の弊害を克服しようとした・一市民の願いにすぎないやうに私には思われる。何より、それは平等の理念であり、市民階級の個人主義的倫理意識の代辯であろう。そして、このような意識が、『賢者ナータン』や初期の劇『エダヤ人たち』においては、宗教的寛容の理念となつてあらわれているわけである。

——『ルターの精神は、いかなる人間も眞理の認識において、自分自身の考えとおりに進むことがさまざまにげられてはならないということ、是が非でも要求する。』(VII・二三〇)

彼の生涯の友モーゼス・メンデルスゾーンは、亡き友を回想して述べている、『迫害された教義に對しては、たとえそれが好ましいものであらうとなかろうと、すべて力をかす』と(『Morgenstunden. Gesammelte Schriften. 2. Bd. S. 367』)彼のこのよ

書 評

な性格は、一般に『救護』(Rettung)として特徴づけられているのであるが、それにしても、晩年の彼の闘争が、『書齋や本屋から、彼の友人や知己の私室の中にまでも及んだ』陰謀にかこまれる程のものであつたとすれば、一體、それはどのような社會での出来事であつたのだろうか。自分の終生にわたる著作を同時代人の眼から完全に秘めたまま世を去らねばならなかつたライマルスは、こゝ語つている——その書の刊行によつて、『人が彼に友情や信頼や交際や交易を、實際あらゆる世話を拒絶し、極悪で身の毛のよだつ犯罪人として彼を避ける』ようなことさえなければ、また墓場も與えられない異端者の子として、子供たちの將來に暗い影を投じようなことをさえなければ、何等恥じることのない・眞實の意見を、肉親や親友の前でさえかくすようなことを誰がするであらうかと。(vgl. D. F. Straub, H. S. Reimarus und seine Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes. Gesammelte Schriften. 5. Bd. S. 248.)

書物の檢閲あるいは出版に對する弾壓が、國家や市民にとつてどれほど損失であり、しかもどのように無益なものであるか——同時代に民衆の啓蒙に限りなくつくしたゲッティンゲン大學教授 A・L・フォン・シュレーツァーが、その點について強調した文章も見出される。(vgl. August Ludwig von Schlözer, Briefwechsel meist historischen und politischen Inhalts. Göttingen 1780. Thl. IX. S. 124 ff.) 啓蒙君主マリードリック二世が許した新聞の自由も、國家及び國王に對する批評は、

例外として保有していたであろう。ウィーンの啓蒙政治はどうかであつたのだろう。メンガー文庫に、ヨセフ二世の下での出版の自由をたえた著者名のないパンフレットがある。(Ubar den Gebrauch der Freiheit der Presse. Wien 1781)おそらく官製であろう。しかし、それも、恵み高き皇帝が愛國心を代償に臣民に賣り渡したものである限り、それはそれなりに、越えがたい公定価格が附されていたことであろう。スエーデン(一七六六年)及びデンマーク(一七七〇年)にも、『名目的』な出版の自由があつた。しかし、當時のドイツには、三百五十もの専政的な小宮廷がうごめいていたことを思えば、『名目的』な自由でも、『官製』パンフレットでも、もらえたところは、それだけ上等であつたと言わねばならぬのかも知れない。

レッスングの死は、一七八一年二月十五日午後八時から九時の間に生じた。愛する妻の死後わずか三年である。それ以前、ほとんど不隨に近い體にあつた。ドイツ全土から送られて来る・おびただしい數の書簡を見ながら、『おそろしく悲痛な笑い』を浮かべる彼を見て、ヤコービは既に彼の死を豫感していた。その笑いは、民衆から見離されて孤獨の死を待つ彼にとつて、何より象徴的であつたろう。市民層の利害を代辯しようとした・彼の一生の努力にもかかわらず、代辯すべき層は彼の背後に失われていたのだから。若き日、イギリス市民經濟學の母胎の一つである・フランシス・ハチソンの書を翻譯し、またアダム・スミスにさえも、ひそかに注目していたと思われる彼も、

信仰が支配的權利を要求していた・ドイツの精神的フナイ氣の中では、晩年の關心を何よりも宗教思想に向けねばならなかつた。その上、愛國心を嫌悪することによつて、政治的な意味での祖國をも持ち得なかつた彼であつた。(一九五三・十二・三〇)